

授業改善の日常化を図る校内研修

—PDCAサイクルを機能させた自己課題の解決を通して—

研究調査チーム

I 研究の趣旨

1 これまでの研究から

昨年度本チームが実施した県内小・中・高等学校（抽出校71校、教員913名）に対する「研修に関する実態調査」によると、ほとんどの学校で校内研修の一環として授業研究が行われている。しかし、その反面「校務の多忙化によって、授業研究の事前研究会や事後研究会等の時間が実質的に確保されていない」「授業研究がその場だけになりがちで、授業改善に対する意識が持続しない」という回答が多く見られ、授業研究が教師一人一人の日々の授業改善に十分に生かされているとは言えない状況にある。

そこで、昨年度より、授業研究と教師一人一人の日常の授業改善とを結び付ける校内研修の在り方を追究することが必要であると考え、本研究に取り組んできた。昨年度は、授業者や参観した教師一人一人の自己課題の解決のために、協働意識を生かしたワークショップ型研修を取り入れた事後研究会等の校内研修モデルを提案した。しかし、教師一人一人の自己課題の明確化とその共有の場の設定が十分ではなかったこと、授業改善の日常化のためのPDCAサイクルが十分機能していなかったことが課題として残った。

2 今年度の取組み

今年度は、昨年度提案した校内研修モデルについて、研究協力校での研究実践事例を累積、充実させるとともに、教師一人一人の自己課題の明確化とその共有及びPDCAサイクルを機能させた自己課題の解決に視点を当て、授業改善の日常化を一層推進できるようにすることを目指した。

II 研究の概要

1 研究主題のとらえ方

「授業改善」……教科の目標を達成するため、教材分析、児童生徒の実態把握、発問・指示、板書構成、指導過程の組立て等について工夫・改善すること。

「日常化を図る」……自己課題の解決のために、単元及び1単位時間の授業の実践の中でPDCAサイクルを機能させること。

「校内研修」……校内研修は校内で行われるすべての研修を意味するが、本研究では特に日常の授業改善に直接結び付く授業研究の在り方に視点を当てた研修ととらえる。

「自己課題」……日常の授業実践において、自ら改善や工夫が必要であると感じる点。授業改善の日常化のためには、日常の授業における課題意識の持続とその解決に向けたプロセスが重要である。したがって、本研究における「自己課題」とは、日常の授業実践を通して浮かび上がってくる「授業改善のために解決すべき自らの課題」ととらえる。

2 研究内容・方法

(1) 研究仮説

校内研修において、次の視点でPDCAサイクルを機能させた自己課題の解決に取り組めば、授業改善の日常化が図られるであろう。

視点1 自己課題の明確化とその共有（Plan）

視点2 「ポイント授業観察」と「単元授業研究会」を
中核に据えた協働による自己課題の解決
(Do Check)

視点3 「授業改善ポートフォリオ」による振り返りと実践事例の累積（Action）

(2) 研究内容

視点1 自己課題の明確化とその共有 (Plan)

- 付せんや概念化シートを活用したSWOT分析*の手法によって自己課題を明確にする。
- 「自己課題一覧表」の作成と課題のグルーピングによって自己課題を共有する。
- 学校の研究テーマと自己課題を関連付けながら、「授業改善目標シート」を作成することで解決のための具体的な手立てを検討する。

*SWOT分析とはStrength(強み)、Weakness(弱み)、Opportunity(機会)、Threat(脅威)の頭文字をとったもので、組織を取り巻く環境から、市場機会分析を行う手法の一つ。S(強み)・W(弱み)・O(機会)・T(脅威)の四つのマトリクス表に整理する過程で問題意識を共有化できる。

視点2 「ポイント授業観察」と「単元授業研究会」を中核に据えた協働による自己課題の解決 (Do Check)

- 研究単元及び重点単元を設定し、自己課題の解決のための具体的な計画を立案する。
- 「ポイント授業観察」及び「単元授業研究会」を通して協働による自己課題の解決を図る。
- ワークショップ型研修を取り入れた事後研究会の実施によって、教師一人一人の参加意欲を高め、研究協議の活性化を図る。

視点3 「授業改善ポートフォリオ」による振り返りと実践事例の累積 (Action)

- 各自が自己課題解決に向けて取り組んだ資料(学習指導案、各種シート、授業記録等)を「授業改善ポートフォリオ」として活用し、授業を振り返ることができるようにする。
- 校内で実践した授業研究の資料を整理し、累積することによって、誰もが容易に検索・活用できるようにする。

(3) 研究方法

研究方法は次の通りである。

- ① 先行研究の分析

校内研修に関する文献及び先行研究の成果や課題の分析を行う。
- ② 研究協力校における事前調査

研究協力校における授業改善と校内研修に対する事前調査を行い、実態を把握する。

③ 提案した校内研修モデルの実践と検証

研究協力校において、三つの視点に沿った校内研修モデルを実践し検証を行う。

④ 研究協力校における事後調査

研究協力校において事後調査を行い、意識の変容の分析を行う。

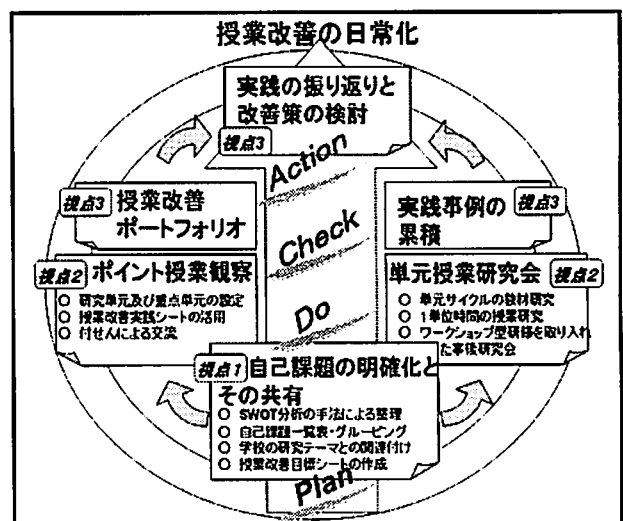
<研究協力校>

今年度は、研究協力校として下記の小学校2校、中学校1校に研究の協力を依頼した。各校の授業研究会等に担当所員が訪問し、本研究で提案する校内研修モデルの実践と検証を行った。

- A 小学校…小規模校、学級数 4(複式学級有り)
- B 小学校…中規模校、学級数12
- C 中学校…大規模校、学級数22

(4) 研究の構想

三つの視点について、下記のように位置付け、研究主題の具現化を図る。



(5) 期待される成果

本研究で提案する校内研修モデルの実践によって、教師一人一人の校内研修に対する参画意識の高まりと授業改善の日常化が期待される。特に、

- 自己課題の明確化とその共有及び協働による解決によって授業研究会の目的が明確になり、教師一人一人の授業改善との関連が密になる。
- 「ポイント授業観察」と「単元授業研究会」、「実践事例の累積」を中核に据えた継続的な取り組みによって授業の質的改善が図られる。

Ⅲ 研究の実際

研究協力校における三つの視点に沿った実践を中心に研究の実際について述べる。

1 視点1：自己課題の明確化とその共有（Plan）

(1) 付せんや概念化シートを活用したSWOT分析の手法による自己課題の明確化

5月の校内研修の時間において、各自が日常の授業を振り返り、教師自身の「強み」と「弱み」、児童生徒の「強み」と「弱み」を付せんに書き出した。次に、4～5人の少人数のグループ毎に、下記のような概念化シートを使って付せんを整理・分類し、日常の授業における「改善や工夫を必要と感じる点」としての自己課題を明らかにしていった。

	教師自身にかかわること	児童生徒にかかわること
強み		
弱み		

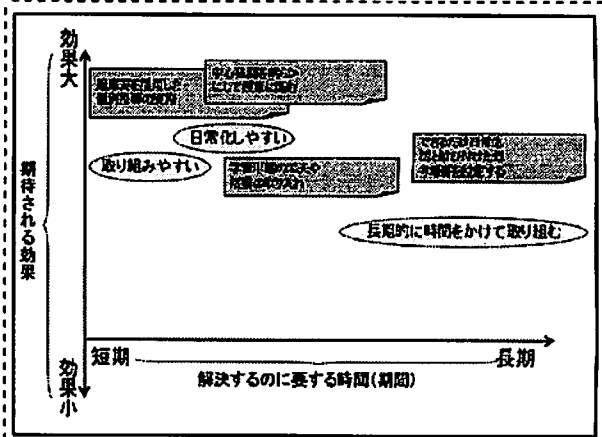
概念化シートのイメージ

SWOT分析は、あらかじめ四つの視点に分けて付せんに書き出すので焦点を絞った分析がしやすい。また、それぞれのエリア間の関連付けを図ることによって問題点を整理したり解決策を検討したりすることもできる。



SWOT分析の手法による自己課題の明確化の様子

次に、各自が下記のような「実行策検討シート」を使い、「自己課題の解決のための具体的な手立て」の検討を行い、自己課題及びその解決のための見通しをより明確にした。



実行策検討シートのイメージ

短期間で期待される効果の大きいものから実践していく。同時に長期間、時間をかけて取り組むべきものを明らかにしていく。

< A小学校 > SWOT分析の手法による自己課題の明確化の例

S教諭（教職経験2年）は、児童にかかわる「強み」として、「学習意欲が高い」「発表やつぶやきを自由に出し合える」こと、教師自身の「強み」として、「全員が発表できるように意図的な指名をしている」ことを挙げた。また、「発問が精選されていない」「板書が計画的でない」「課題提示に工夫が足りない」ことが教師自身の「弱み」であり、授業改善のために解決すべき課題であると分析した。

そこで、S教諭は、次の三つを短期間で取り組むべき手立てとして「実行策検討シート」に位置付けた。

- 中心となる発問とその機会を授業計画の段階で明確にしておく。
- 学習内容をもとに板書構成を検討する。
- 前時の学習や日常生活と関連付けた課題の提示に心がける。

(2) 「自己課題一覧表」の作成と課題のグルーピングによる自己課題の共有

明らかになった自己課題を一覧表に整理し、さらに並べ替えを行うことによって、「誰がどんな自己課題を持っているのか」「自分と同じ自己課題を持っているのは誰か」など、同僚間で自己課題を共有できるようにした。

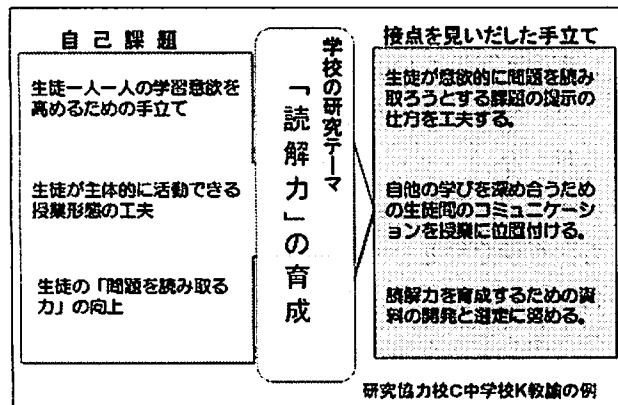
自己課題の明確化と共有化ワークシートの付せんの記録より 小学校

教師自身にかかわること		付せんの内容
姓 氏 名	小見出し	
教 師	意見の取り上げ方	多様な考えを上手く整理できない。
教 師	意見の取り上げ方	子どもからの意見を主としすぎず、教師の考えだけで進めてしまおう。
教 師	意見の取り上げ方	発言していない児童への対応が十分にできていない。
教 師	意見の取り上げ方	子どもたちからの意見の取り上げ方が難しい。
教 師	意見の取り上げ方	児童から出された多様な考えを時間内に上手く整理できない。
教 師	意見の取り上げ方	話し合いが各自の発表のみで終わり、掘り上げが足りない。
教 師	学習の場の工夫	学習が楽しく伸び伸びとできるように場を設定している。
教 師	課題解決の仕方	常に既習事項を生かした解決ができるように課題解決の仕方を説明している。
教 師	教育媒体	教育媒体が使いこなせていない。
教 師	教材研究	じっくり教材研究をしたり、新しい探みに挑戦していない。
教 師	教材研究	教材研究を十分にしないまま以前に行った経験を繰り返して授業をやっている。
教 師	形態の工夫	学習の進捗や意欲低下の児童を引っ込め込むための学習形態の工夫、小集団、話し合い学習の工夫。
教 師	個別指導	意欲がなかったり集中できなかったり理解できていなかったりする児童への個別指導が不十分。

自己課題一覧表の作成と課題のグルーピングの例

(3) 学校の研究テーマと自己課題との関連付け及び「授業改善目標シート」の作成

多くの学校では共通の研究テーマを設けて研究を進めており、ともすると各自の自己課題とは別なものという意識になりがちである。そこで、下記の例のように学校の研究テーマと各自の自己課題との接点を見だし、関連付けるようにした。



学校の研究テーマと自己課題の接点を見出した例

また、次のような「授業改善目標シート」に児童生徒の実態、自己課題解決のための視点、目標とする授業、具体的な手立てと実践計画を記入すること

によって、PDCAサイクルを意図的に機能させるようにした。

研究協力校：A小学校S教諭の例

授業改善目標シート

<p><児童・生徒の実態></p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 自分の考えを思いのままに発表できる。 <input type="checkbox"/> 「やめてほしい」という気持ちが高い。 <input type="checkbox"/> 集中力が持続しない。 <input type="checkbox"/> 学習したことを活用できていない。 	<p><自己課題解決のための視点></p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 分かりやすい説明された説明の工夫 <input type="checkbox"/> 効果的な報告の工夫 <input type="checkbox"/> 話し合いの工夫
--	---

<目標とする授業（目指す児童・生徒の姿）> 教科書の観点（目標等）、学習法の観点から

教科書の観点（目標等）から

- 見出しを持って課題に取り組み、みんなでどうという方法を見つけ出す子ども

学習法の観点から

- 「解きたい、分りたい」と思える課題の提示や発問によって積極的に自力解決を行う児童
- 学び合う場を設定し、友達と意見を比較検討することによって、よりよい解決の仕方を見つけて発表する

<具体的な手立てと実践計画>

<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 意見を比較検討しやすくするため、分類したり違いを明確にしたりする工夫や質問の録音 <input type="checkbox"/> 子どもの考えを生かした児童参加型の報告の工夫 <input type="checkbox"/> ① 図や表を用いるなど「解きたい、分りたい」と思える課題提示の工夫 <input type="checkbox"/> ② 見出しがもてるような発問や課題提示の工夫 	<table border="1" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th>月日</th> <th>実践計画</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>6/17</td> <td>研究單元「水のかさをはかる」の工夫</td> </tr> <tr> <td>8月</td> <td>具体的な手立ての振り返り</td> </tr> <tr> <td>11月</td> <td>研究單元「四角形を調べよう」</td> </tr> <tr> <td>12月</td> <td>実践のまとめ</td> </tr> </tbody> </table>	月日	実践計画	6/17	研究單元「水のかさをはかる」の工夫	8月	具体的な手立ての振り返り	11月	研究單元「四角形を調べよう」	12月	実践のまとめ
月日	実践計画										
6/17	研究單元「水のかさをはかる」の工夫										
8月	具体的な手立ての振り返り										
11月	研究單元「四角形を調べよう」										
12月	実践のまとめ										

<振り返りと今後の改善点>

「授業改善目標シート」の例

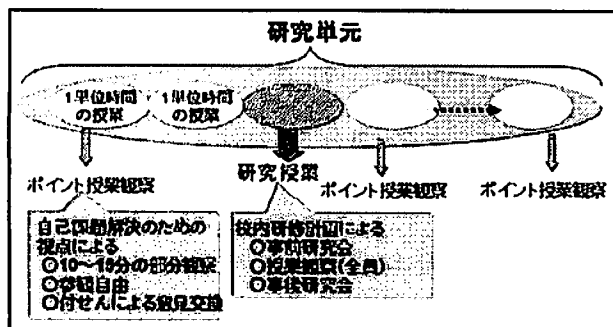
2 視点2：「ポイント授業観察」と「単元授業研究会」を中核に据えた協働による自己課題の解決 (Do Check)

(1) 研究単元及び重点単元の設定と自己課題の解決のための具体的な計画の立案

授業研究会の年間計画や教科の年間指導計画をもとに、「ポイント授業観察」及び「単元授業研究会」を行う「研究単元」と「ポイント授業観察」のみを行う「重点単元」を設定し、前述の「授業改善目標シート」を作成した。このことによって授業研究会が、学校の研究テーマとともに自己課題の解決の場であることの位置付けが明確になり、教師一人一人がより主体的に授業研究会に取り組めるようになると考えた。

(2) 「ポイント授業観察」及び「単元授業研究会」を通じた協働による自己課題の解決

今までの授業研究会は、単元の中の1単位時間の授業を研究授業として公開（観察）し、事後研究会で協議するという形が一般的である。本研究における「単元授業研究会」では、これまでの研究授業を中心としながらも、下記のように1単元に2～3回程度の「ポイント授業観察」を設定し、1単元という長いスパンで授業研究に取り組むことができるようにした。



単元における「ポイント授業観察」の位置付け

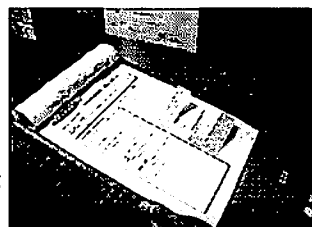
「ポイント授業観察」は、各自の授業改善の視点、自己課題の解決にポイントを絞った10～15分程度の部分的な授業の公開（参観自由）を原則とし、次のような手順で行った。

- ① 授業者は、本時の目標と主な展開案及び自己課題解決のための視点を簡潔に記入した「授業改善実践シート」を参観者へ配付する。
- ② 参観者は、授業を観察し、気付きや考察を付せんに書いて授業者へ渡す。
- ③ 授業者は、集まった付せんをもとに授業改善の視点、自己課題の解決状況について振り返る。



参観者の付せんが貼られた「授業改善実践シート」→

←C中学校の「ポイント授業観察」の様子



研究協力校：A小学校E教諭の例
月 日 ()

授業改善実践シート

6学年 組 教科名 算数 指導者

<単元名・本時の目標>

単元名 比べ方を考えよう
本時の目標 面積、人数が異なる場合の組み合わせの比べ方を理解する。
(2/総時数18)

<本時の展開・授業改善の方策> <反省・考察> ※付せんの添付

- 1 本時の課題をつかむ。
どのパンガローがこんでいるか調べよう。
- 2 解決の見通しをもつ。
- 3 自力解決をする。
<ポイント観察 10:46～11:00>

観察の視点

- 視点を明確にした練り上げの場の工夫
 - ・一人の考えを、みんなに広げさせるための支援
 - ・数理のよさを生かした考え方からよりよい考えを見付けさせるための発問の工夫

- 4 結果とその理由について話し合う。
 - (1) それぞれの考えを提示し合う。
 - 1人あたり的人数で求めた見通し
 - 1人あたりの面積で求めた見通し
 - 公倍数で求めた見通し
 - (2) 速く・簡単に・正確・いつでもの観点から、考えのよさに気付く。
 - (3) 単位量で求める方法を理解する。
- 5 組み合わせの比べ方を整理する。
- 6 応用問題を解決する。
- 7 本時のまとめをする。

「授業改善実践シート」の例

<A小学校>「ポイント授業観察」によって自己課題解決のための具体的な手立てを修正した例

6学年の担任であるE教諭（中堅教員）は、自己課題の一つとして「視点を明確にした練り上げの場の工夫」を挙げていた。そこで、研究単元である「比べ方を考えよう」において「一人の考えをみんなに広げさせるための支援」「数理のよさを生かした考え方からよりよい考えを見付けさせるための発問の工夫」の二つの手立てで「ポイント授業観察」を実施した。その結果、参観者から次のような付せんによるアドバイスをもらうことができた。

- 教師の発問（「どのやり方がやりやすいか」「もっと大きな数ならどうするか」）によって、児童から「公倍数にするのには時間がかかる」「わり算で比べると簡単だ」等の意見が引き出され、視点を明確にした練り上げになった。

- 「なぜ、その考えがいいんだろう」と理由を問いかけたことで数理のよさに結び付いた。
- Kさんの考え方とMさんの考え方は、同じ考え方として教師がまとめてやった方がよいのではないのでしょうか。
- Mさんの間違いをあえて取り上げると「混んでいる」ことの意味が深まったかもしれない。
- 「考え方のタイトル」を生かして、みんなで考え方を分類するとよかったのではないかと。

E教諭は、これらのアドバイスをもとに自己課題解決のための具体的な手立てについて次のように振り返り、修正を加えた。

- ◇ 公倍数を使って比較したのは一人の児童だけであった。他の児童にその考えを共有させるために、教師が切り返しの発問をして具体的に理解させる必要がある。また、大切なことはその都度板書するなどしていきたい。
- ◇ 児童の考えを「考え方のタイトル」で分類し、色チョークを使って板書すると分かりやすい。
- ◇ 児童のつまずきやよい考えを見取るために、机間指導と座席表の活用の工夫を図りたい。

(3) ワークショップ型研修を取り入れた事後研究会の実施による協議の活性化

事後研究会における一人一人の主体的な参加意識の向上と協議の活性化のために、ワークショップ型研修を取り入れた事後研究会を実施した。基本的な進め方については次のとおりである。

※ 授業観察中及び事後研究会が始まるまでに各自が付せんに記入しておく。(二色の付せんを使い、成果と課題に分けて記入)

- 1 事後研究会の進め方の説明 (3分)
- 2 授業者からの自評、質疑応答 (5分)
- 3 グループ (4~5名) ごと協議 (40分)
 - (1) 短い説明を加えながら一人一枚ずつ付せんにワークシートに貼る。
 - (2) 内容が同じ付せんにまとめる。
 - (3) まとまりごとに小見出しを付ける。

(4) 授業の成果と課題を確認する。

- 4 各グループからの報告・情報交換 (各3分)
- 5 授業者からの考察 (5分)



ワークショップ型研修を取り入れた事後研究会の様子
実施にあたっては、協議の視点(学校の研究テーマ及び自己課題解決のための視点)を明確にした下記のようなワークシートを作成し、それぞれについて授業の段階に沿って振り返ることができるようにした。また、ワークシートは、事後研究会で使うグループ協議用(A2判)とともに、授業前に参観者へ配付する授業観察用(A4判)を準備することによって、参観者が視点を明確にして授業を観察できるようにした。

事後研究会ワークシート		月 日 ()	授業時
観念	① 導入における課題記憶 ② 教材内容と児童・児童の反応による一人一人の課題意識をまとめる。	③ 自力解決の場における ④ 対話による協議の工夫	⑤ 一人一人の考えをまとめる ⑥ 異議を唱えようとする ⑦ 異議への対応と質問・回答の交換による一人一人の考えを整理し、まとめる。
質問			⑧ 学習の進め方の確認と協議の活性化を図る。
場面	⑨ 机間指導・指導者の活用 ⑩ 対話・協定		⑪ 学習の進め方の確認と協議の活性化を図る。
個人	⑫ 対話・協定 ⑬ 対話・協定		⑭ 学習の進め方の確認と協議の活性化を図る。
協議			⑮ 学習の進め方の確認と協議の活性化を図る。
授業者			⑯ 学習の進め方の確認と協議の活性化を図る。

ワークシートの例

< B小学校 > 事後研究会に対する意識の変容の例

B小学校は、これまでも効率的な校内研修の在り方を模索し、様々な実践をしてきていた。その実践の一つとして、研修主任が授業終了後

に参観者のコメントが記入された付せんを集約し、事後研究会が始まる前までに、グルーピングと小見出し付けを終え、事後研究会では、できあがったワークシートをもとに協議する方法で会議の効率化と内容の焦点化を図っていた。しかし、どうしても一部の教師の意見と指導助言に偏る傾向があった。

そこで、本研究のワークショップ型研修を取り入れた事後研究会を実施した。その結果、はじめのうちは形にとられるあまりに形式的な話し合いになりがちであったが、回を重ねるごとに活発な意見の交換が行われるようになった。研究協力校における事後調査では、多くの教師から「少人数のために意見を出しやすくなった」「簡単な説明を加えながら順番に付せんを貼っていくので全員が平等に話す機会が与えられている」「協議の内容や今後の方向性が視覚的にとらえやすい」などの声が聞かれ、参加意欲の向上と協議内容の深まりが見られた。

<C中学校>他学年の事後研究会の成果を自らの授業改善に生かそうとした例

C中学校の研究テーマは「読解力の育成」であり、2学年の数学担当であるS教諭は、数学科における読解力の育成のための具体的な手立てについて問題場面の提示を工夫したいと考えていた。

2学期に入って本格的に授業研究会が始まり、3学年の数学担当のE教諭の単元授業研究会が実施された。

E教諭は、「2次方程式」の問題を教科書にあるようなはじめから抽象化されたものではなく、



E教諭の「2次方程式」の授業の様子

身近に起こりうる事象を提示し、抽象化の過程の中で読解力を高めようと試みた。事後研究会では、「生徒の興味・関心」という点ではプラスの評価

が得られたが、「問題の抽象化がイメージされにくい」「何を x として何を求めるのが全員に理解されていない」などの課題が残った。

S教諭はこれらの協議の結果を自らの授業改善に積極的に取り入れ、単元授業研究会である「1次関数」の授業では、E教諭と同じように身近な事象を提示



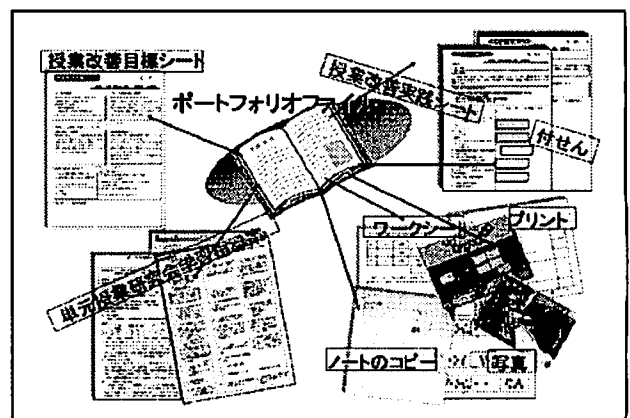
し、いくつかの簡単な数値の場合を段階的に考えさせることによって、具体的 S教諭の「1次関数」の授業の様子に問題場面のイメージ化を図ることができた。

3学年を担当するE教諭と2学年を担当するS教諭の授業をもとにした数学科部会の協働によって、数学科における読解力の育成につながる問題提示の方法とイメージ化のための具体的な手立てが明らかになった。

3 視点3：「授業改善ポートフォリオ」による振り返りと実践事例の累積 (Action)

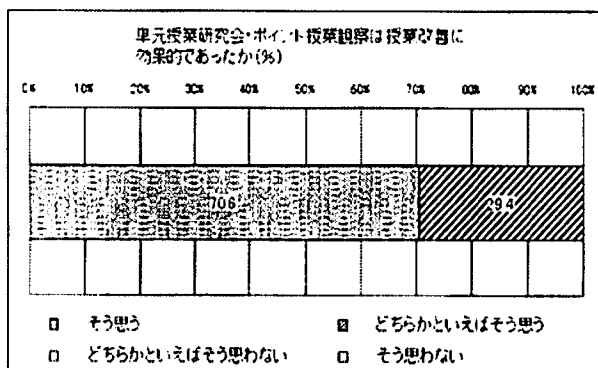
(1) 「授業改善ポートフォリオ」の活用

下記のように、学習指導案、各種シート、授業記録等自己課題解決に向けて取り組んだ資料を累積し、授業を振り返ることができるようにした。そして、それらの資料を「授業改善ポートフォリオ」として活用した。



「授業改善ポートフォリオ」のイメージ

校の全ての教師が、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えている。



また、その理由として「自己課題を意識して公開することができたから」(36.8%)、「同僚から自己課題についてアドバイスをもらうことができたから」(34.2%)、「自己課題がより具体化されたから」(18.4%)「単元という長いスパンで授業を考えることができたから」(10.5%)が挙げられた。

(4) 自由記述による感想より

① 「自己課題の明確化とその共有」について

- 自分の課題を解決しようと思っても、どう取り組んでいいか分からなかったり、やりそびれたりすることが多かった。学校全体で取り組むことで自分の課題がより明確になり、その手立てなどを共有することができた。
- 自己課題を一人で設定しようとする、考えに偏りがあり、本来取り組むべき課題より安易な課題になってしまいがちである。付せんによる協議は自己課題の設定に効果的である。
- 自己課題が明確になったことはよかったが、日々の多岐にわたる校務に追われ取り組む余裕がない。研究授業のときだけ取り組むようになる傾向がある。

② 「自己課題の解決に向けての取組み」について

- 自力解決の場面を意識して設定するようになり、解決への見通しを持たせるにはどうすべきかを考えたりして取り組むようになった。
- 自分の一番の課題は導入時の課題提示の仕

方だと思っている。それを日常の授業の中で意識するようになり、自己課題の解決に少しは向かっていると思う。

③ 「『ポイント授業観察』の実施と協働による自己課題の解決」について

- 「ポイント授業観察」の授業者が、同じ単元で数回授業を行うことで見通しを持った指導や発問の精選ができた姿を見て、自分自身の課題がより明確になった。
- 発問の工夫や精選、そして学び合いの仕方など自分だけでは解決できずにいたことでも、いろいろな学年の実践を見ることで解決の糸口を見付けることができたと思う。
- 校内の授業研究が重なるため、自習の時間が多くなり負担は変わらない。
- 「ポイント授業観察」では、ポイントは絞られるが授業者の意図がその部分だけでは伝わりにくい場合があり、結局は授業の大部分を参観してしまうことが多かった。

④ 「ワークショップ型研修を取り入れた事後研究会」について

- ワorkshop型研修を取り入れた事後研究会は、意見が出しやすく、深く掘り下げて協議ができたため大変効果的であった。
- よい点、課題となる点が色別の付せんで視覚的にとらえることができ、自分の課題がよく分かる。
- ワorkshop型研修を取り入れた事後研究会は、少人数のため話しやすいが、その後の交流の仕方をもう少し工夫する必要があるように思われる。それぞれのグループで特に話題になったことに絞って出してもらおうと、それらについて全体で話し合うこともできるように思う。



事後研究会の様子

Ⅳ 研究の成果と課題

1 成果

校内研修というシステムの中に、教師一人一人の持つ自己課題という視点を取り入れ、その自己課題をPDCAサイクルを機能させながら解決できるようにしてきた。

研究協力校における実践並びに事後調査の結果、各視点について、次のような研究の成果が確認された。

(1) 視点1「自己課題の明確化とその共有」(Plan) について

自己課題を協働によって明確化し共有したことで、課題解決のための具体的な手立てが明らかになるとともに、授業実践の計画がより詳細になり、自己課題の解決に向けて授業研究及び日常の授業改善に計画的に取り組もうとする意識が高まった。

(2) 視点2『ポイント授業観察』と『単元授業研究会』を中核に据えた協働による自己課題の解決(Do Check) について

「ポイント授業観察」及び「単元授業研究会」において、具体的な手立ての有効性や改善策が検討され、教師一人一人の自己課題の解決につながった。

(3) 視点3『授業改善ポートフォリオ』による振り返りと実践事例の累積(Action) について

授業改善ポートフォリオの活用及び実践事例の累積によって、教師一人一人の授業の振り返りと同僚との情報交換が積極的に行われ、さらなる実践の見直しを持つことができた。

2 課題

研究協力校における実践並びに事後調査の結果、「学校規模や個人の研修ニーズに応じた、より深まりのある授業研究の持ち方」「授業研究に対する負担感及び多忙感の軽減」等の課題が残った。

今後は、これまでの校内研修モデルを基本型とし

ながら、校種、学校規模、研修ニーズ等、より学校の実態に応じて機能する校内研修モデルを提案していきたい。



子どもも教師も笑顔になれる授業を目指して

<参考・引用文献>

- 1) 学校組織マネジメント研修 - これからの校長・教頭等のために - (マネジメント研修カリキュラム等開発会議 2004年)
- 2) 授業にいかす 教師がいきる ワークショップ型研修のすすめ 村川雅弘編著 (ぎょうせい 2005年)
- 3) 校内授業研究の進め方 ガイドブック - 平成19年度版 - (岩手県立総合教育センター 2007年)
- 4) これからの校内研修の在り方 - 授業を変える『評価力』 - (香川県教育センター 2008年)
- 5) 秋田県総合教育センター研究紀要 第39集『授業研究の活性化を図るための研修方法の工夫・改善』(秋田県総合教育センター 2007年)
- 6) 授業改善サポートブック - 授業改善サイクルの日常化を図るために - (福島県検証改善委員会 2008年)
- 7) 授業改善ハンドブック『授業の窓』授業を磨く (福島県教育資料研究会 1999年)